同盟通信報

第三十號

昭和十五年三月五日發行
毎月一回・五日發行

本誌定價一部金五錢
一年（共稅）金六拾錢

編輯兼發行印刷人　大川幸之助

東京市京橋區銀座西七ノ一
發行所　同盟通信社

青島會議回顧

# 我社ロネオの偉力

横田實

汪精衞氏の中央政府樹立に必須の前提をなすものは臨時、維新兩既成政權首腦者と汪派首腦部との完全なる諒解の成立と意思の疏通とであつた。昨年九月汪、王、梁三巨頭の第一次會談が行はれて以來、第二次會談が開かるれば、玆に重慶蔣政權を法的にも否定し得る新中央政府の樹立期して待つべし、といふ信念が國民の間に強く植えつけられて來た。從つて青島會談に對する期待は有言無言裡に日を趁ふて熾烈なものがあつた。

愈々一月二十三日から青島會談開かると決定した時、中央政府成立近しの喜びが、期せずして青島に輿論の耳目を集中したのも無理からぬところだつた。會談中青島に蝟集した新聞通信關係者は、現地の人々を併せて實に百二十何名に達した。尤もこれは記者ばかりでなく寫眞、映畫、無線技師に若干の支那記者も含めた數であるが會議當事者もこんなに集ろうとは全く豫期しなかつた樣であつた。

×　×　×

寫眞は一月二十八日於青島支局撮影、前列右より福成青島支局員、横田東亞部長、件野青島支局長、後列右より松田蒙疆新聞特派員、阿部青島支局員、勝下同上、齋藤北支總局記者、井關中南支總局記者、殿木同上、川崎同上、松原北支總局記者、左端及最後方三名は華人記者。

我社の陣容は現地青島の伴野支局長はじめ支局員諸君に、上海總局から殿木、井關兩記者、外に川崎記者が中聯の華人記者三名を率ゐて參加し、北支總局から齋藤、松原兩記者、小椋寫眞、川口映畫、泉無線技師、それに華人記者二名といふ大掛りとなり、其處へ上海出張中だつた筆者が加つて、通信戰に、寫眞映畫戰に數日間相當の火花を散らした。青島は地理的關係から上海、北京とも無線連絡が思ふ樣でなく夕方から感度がグツと落ちるので一時は可なり悲觀されたが、支局の勝下技師と泉技師の努力のお蔭で、それも忽ち解消、折柄海底線故障とあつて有線は青島、上海間に十時間以上を要する狀態だつたため思ふ存分我社ロネオの偉力を發揮することが出來た。

寫眞、映畫の飛行機積込みにも小椋、川口兩君が相當の離れ業をやつてのけて他社をアツト言はせたり、つなぎつぱなしの長時間連絡に、見事連續的長文ものを叩き込んだり、すべての點に愉快な勝ち戰さを記錄することが出來た。

これには伴野支局長以下支局員諸君の寢食を忘れた協力があり、同時に青島と上海連絡本部と本社との一本の糸が完璧に繫がつた努力にも俟たねばならない。

×　×　×

本社から豫想以上の朝夕刊成績がバタで送られる都度、一同は肩を抱いて喜びの聲を擧げた。實際それは僕としても久し振りに味ふ快味であつた。他社に拔かれたものは先づ一本も無かつた樣に記憶するし、一方會議そのものも、多少の波瀾は免れないかに見られてゐたに拘らず、臨時政府の王克敏氏も、維新政府の梁鴻志氏も、寧ろ意外とする程の協力的態度に出たがために、何らの困難も生ぜず審議延期とか次回持越しなどといふ派生問題も起らず、實に圓滑順調裡に、豫定より丸一日早く終了して大團圓を告げたので、あらゆる點から愉快な、好ましい後味を持たせた青島會談であつた。

×　×　×

二十三日の蒙疆代表と汪代表との會見を皮きりに、二十四、五の兩日ですべてを議了、二十六、七日に上海、南京、蒙疆へ、一行それ〴〵引上げ、我社同人も或は飛行機或は船、汽車等で南北に別れを告げた。筆者も二十九日青島發の船で歸社に就いたのだが今度は、いよ〳〵中央政治會議から中央政府樹立への本舞臺が○○にかゝるのだ。各社も精鋭をすぐつて手具脛引く事であらう、もとより我社に於ても準備をさ〳〵怠りないし、青島會議など足もとにも及ばぬ通信戰、近年稀有の大袈裟なニユースに、寫眞に、映畫に文字通りの通信合戰が展開されるであらう、それは國內通信戰をのみ指すのでなく、同盟を目標とする各國新聞通信社との國際通信戰となること言ふまでもないのだ。同時に又重慶側のデマ宣傳を粉碎するものでもなければならない。ともすれば此頃無風帶溫床に潜り込みそうになる現在の日本の新聞通信界にとつて、それは正しく一服の興奮劑でもあるのだ。この意味に於て僕は南京の本舞臺戰に必勝を期すと共に、他の大きな意義を痛感して居る一人でもある。

## 消息

常務理事　上田碩三
病氣靜養中の處全快二月初旬出社

前モスクワ支局長　萩野伊八
歸國の途中歐洲動亂勃發のため滯歐各地に轉駐活躍中の處二月四日歸着

天津庸報社長　大矢信彥
二月十日着京、十四日東京發歸任

編輯局長　松本重治
二月二十一日東京發中南支へ出張

社會部次長　高尾辰馬
南寧作戰に從軍中の處二月十八日歸社

北支總局英文部長　三輪武久
三月中旬赴任の豫定

總務局參事　樺山丑二
二月二十九日東京發中南支へ出張

# 青島會議寫眞空輸

小椋留吉

**思ひ出しても愉快**

青島會談の寫眞、映畫空輸はスタートからフイニツシユまで非常に順調で、はじめヒツチと思はれたものが却つて好結果に轉じたりして豫期以上の成績を擧げ得たのは本當に愉快だつた。殊に二十三日定期機が缺航した時、同盟代用機のロツクヒードが難航を冒して出發し強い追風を受けて二時間二十分で雁の巣に到着した如きは想ひ出しても愉快を禁じ得ぬ。

×　×　×

臨時政府代表王克敏氏一行が二十一日に先づ青島の滄口飛行場に着いのが正午過ぎであつた。福岡行き定期便は丁度正午過ぎに飛ぶことゝになつてゐたで日航大坪支所長に時間が許す限り待つてもらふことを豫め話して置いた。

飛行機から王氏一行が降りて貴賓室に入つたのは十二時二十分だつた。各社のキヤメラマンは一齊にレンズを向けた。僕も三枚程撮つて急いで貴賓室から表に飛出して見ると定期便はもう白い砂塵を立てゝ一丁程先を滑走してゐた。シマツタと思つて支所長のところに馳つけるとトラツクにエンジンをかけて待つてゐた。「どうですか間に合ひますか」と訊ねると默言つて原稿をひたくつて滑走路を五十哩位のスピードで走らせてスタートラインについた飛行機の眞前から大膽に橫切つて停止させたのが遠くから見えた。原稿は完全に積込まれた。

この定期に原稿を積んだのは同盟だけだつたのだ。こんな際どい積込は全く大坪支所長の深い理解の力で我等が衷心から感謝したところである。

×　×　×

二十一日には同盟代用機のロツクヒードが北京から飛來して待機してゐた。二十二日は汪首席を始め梁鴻志、李守信代表が青島入りをして野村司令官を訪問し、午後六時から汪氏と記者團の會見もあ

新聞通信調査会 JAPAN PRESS RESEARCH INSTITUTE

つて寫眞原稿は相當豐富だつた。この日同盟陣の總指揮として來青した本社の横田東亞部長と相談の結果、代用機を二十二日朝飛ばすことにして準備を整へたが、急に寒氣が襲來してエンヂンが冷えプロペラが廻らなくなつた。午前八時から十時半まで懸命に努力したが、とうとうエンヂンがかゝらないで、その日の原稿は定期便に積替へて十一時半福岡に輸送した。

之れが却つて幸運に轉じたのだつまりこの結果同日の三巨頭の會談、溫室內の談笑、李、周會見等今次會談寫眞の最もいゝものを代用機で空輸する事が出來た譯である。

×　×　×

內地方面は二十日頃から天候が惡くて二十二日には福岡發の青島行きが飛ばなかつた。從つて二十三日の福岡行の定期便は出ないことになつたので、各社は相當あわてた様であつた。航空會社は代用機を飛ばすのに萬全を期して約二十名の地上勤務員が飛行場にあるロツクヒードのエンヂンを冷さない様に煖爐を焚いて泣く程寒い夜を徹宵準備してゐて呉れた、朝八時に飛行場に原稿を持つて行くと既にプロペラは爽かな爆音をたてゝゐるではないか。前夜の電報によつて各社の原稿も積むことになつたので東日、朝日、新愛知が原稿を頼みに來る。午前八時四十分代用機ロツクヒードは時速三百五十キロ、彈丸の如く福岡に向けて飛び去つた。缺航してゐる空路を重要原稿のため無理して飛んで呉れたのだ。しかも飛行機は相當强い追風に惠まれて二時間二十分で無事雁ノ巢飛行場に着陸して樂々と夕刊に電送が出來た。

×　×　×

內地行は片附いたが北京、上海方面へ飛ぶ定期機が無い。イライラして焦慮してゐると、その日の正午李守信蒙疆代表が臨時機スーパーで北京に歸ることを聞込んだ。出來てゐた原稿をつかんで飛行場にかけつけると丁度飛び出す前で直ちに托送して北京方面の新聞の朝刊を飾る事が出來た。

二十四日も定期は全部缺航したが、要人連を乘せて來てゐた臨時機が南京を經て上海へ、又北京にもそれぞれ午前十時半に出たので之れにも同盟代表撮影の會談第一日の數種を托送した。全線缺航中に空輸連絡が恁んなに調子よく行つたのは恐らくない事だと思ふ。結局スタートが肝要で第一回の輸送に成功したのが關係者の氣を良くさせ、之れが原因となつて終りまでトントン拍子に行つた譯だ。關係した各位に深い感謝を捧げる。(一、三二)

# 在臺一年有半

吉田哲次郎

早いものだ、在臺一年有半は一瞬の裡に過ぎたやうに思へる、とりわけ聖戰の火蓋が南支に切られてからは一切の聯絡基地が臺北に置かれた關係上、來る日來る日がめまぐるしく廻轉した。臺灣六社への記事配給はもとより一般、經濟通信の發行そして廈門、汕頭、廣東、海口との聯絡――これらがすべて遲滯なく遂行されねばならない。少い人數ではあつたがたゞ同盟魂の集中した總力がすべてを解決した。手不足はいまも解消してゐないに違ひない。離れ難き氣持を殘して僕は臺北を去つたのである。

×　×　×

春とは言へ、空つ風が銀座に吹き募るこの頃臺北では春の陽光が檳榔樹や榕樹や、椰子の梢に注いでゐる。北回歸線を南に越えた臺南、高雄は冬服では汗ばむ位、しかしそんな土地でも住み慣れた人々にとつては冬は冬なりにオーバーが欲しい位の寒さを感じるさうだ。

夏は日に必ず一度やつてくる夕立のお蔭で夜は爽凉を覺える。內地のやうに蒸し暑い寢苦しい夜など絶對に無いといつてよい。

花に草に四季とりどりの移り變りはあつても、見たところ山も野もいつもおしなべて綠だ。川は淸冽、星は美しい。

×　×　×

米は一年に二度とれる、甘蔗は一望千里の沃野を埋めてゐる。バナナ・鳳梨を始めマンゴー・白柚など珍果美果は數多い、すべてがアメリカのボルダー・ダムに比肩する嘉南大圳の賜物である。しかも長い間米糖を中心に動いてゐた農業臺灣は近時勃興したアルミニウム・金屬マグネシウム・曹達・バガスパルプ・無水酒精などの新興工業によつて工業臺灣の姿を新しく示現し始めた。石炭も電力も豐富だ。基隆(北)高雄(南)花蓮港(東)新高(西)の四港には力强く工業地帶が形成されつゝある。舊臘世の視聽を集めた砂金はいま全島三十有餘の河川上流に調査が進められてゐるから近くその全貌を示すだらう。

×　×　×

南支・南洋への航路が新しく開かれ臺北飛行場は一躍國際飛行場となつた、臺灣技術の南支進出も素晴らしい。――臺灣はもはや瘴癘蠻霧の境ではない――その昔ポルトガルの航海者が海上鬱蒼たるこの島を眺めてイラ・フオルモサと感嘆した華麗島は單に蓬萊島たるに止らず、新南群島を包合していまやあらゆる意味において注目の焦點となつた。

米の出廻りが惡い、マツチがない、一斤の砂糖を求めて繁華街に數丁もの蟻の行列を作つた本島人の姿も見られぬこともない。しかし臺灣はまだ鷹揚だ。

回顧の筆はいつしか臺灣禮讃へ逸れてしまつた。が臺灣の現狀には幾多の問題が横つてゐる、事變下漸く再認識された臺灣はいまその現狀を再檢討すべき段階に立至つてゐると考へる。(二、二二)

# 同盟通信社第十八回理事會

同盟通信社第十八回理事會は廿七日午後一時より丸の內東京會館に於て開會、古野社長より義案第一號昭和十五年度收支豫算の說明を行ひ愼重審義可決したが、右豫算は一般會計に於て七百四拾九萬六千圓(前年比百三拾七萬圓增)特別會計百四拾六萬五千圓(前年比二拾萬圓增)以上一般特別兩會計あはせて、八百九十六萬一千圓(前年比百五十七萬圓增)である。次いで義案第二號の社費月額改定の件に入り、同じく古野社長より說明を行つたが要するに歐洲動亂勃發以來海外ニユース蒐集費が以外に嵩み、加ふるに物價高の時局を反映して、社費月額分擔金引上げの已むなきに至つたといふのであつて結局

現在社費月額に對し各社の實勢力及び配給通信の容量を參酌して一割乃至三割の增額をなし以て負擔率を適正化せしめる事を現業理事に一任と決定した。

報告事項

一、理事異動　昨年九月九州日日新聞社伊豆富人氏辭任
一、故岩永社長に對し弔慰金贈呈の件(以上理事會長報告)
一、社員新聞社異動　第十七回理事會以後退社六社(大大阪市民新聞、金澤新報、高知日日新聞、唐津日日新聞、愛媛新報、西鮮日報)
一、海外支局新設
廈門、南昌、汕頭、安慶、運城南寧
一、分館落成の件
一、職制改正の件　從來の六局を四局に改む
一、日本商業通信社事業委託の件　姉妹機關たる株式會社日本商業通信社は經費の節約と經營合理化を計るため本年一月より事業の一部を同盟經濟局に經營委託せり(以上古野社長說明)午後三時閉會

# 古野社長伊勢參宮

――鄕土富田町訪問――

古野社長は去る二月八日午後十時三十五分東京驛發西下、九日午前九時九分山田驛着、伊勢神宮參拜の後午後二時十八分四日市驛着直ちに四日市々役所を訪問吉田市長の案內で市內工業地帶の躍進振りを視察、同夜は出生地同市郊外富田町に一泊翌十日は富田町役場富田小學校工場街等を視察し、二日間に亙る鄕土訪問を終へ同夜九時二十二分富田發歸京した。

# 萩野特派員歸朝報告

二月十七日午後四時半から東亞部主催の下に本社分館會議室で、最近歸朝したモスクワ特派員萩野伊八君の土産談を聽いた。

畠山、堀兩常務以下有志多數參集、駐ソ三ケ年の體驗談、表面からでは到底知り得ない深酷さを持つソ聯事情等約一時間半に亙つて語つたが、聽者はまだ何ものか聽き殘したものがある様な名殘惜しさで興味深い報告談は終つた。

# 東亞操觚者代表同盟本社見學

二月十一日から四日間東京市に於て開催の市主催、紀元二千六百年紀念東亞操觚者懇談會に出席の滿洲、北支、中支、蒙疆、南支、布哇、南洋竝に內地代表の新聞人百五十餘名は十四日午後二時半同盟本社を訪問、八階大會議室に於て古野社長から同盟機構に關する說明を聽き幹部社員の案內で內社を見學三時半辭去した。

(寫眞は編輯室見學)

**△奉天支局移轉**

奉天市協和街五段二三
社團法人同盟通信社奉天支局
(電略及電話番號等は從前通り)

新聞通信調査会 JAPAN PRESS RESEARCH INSTITUTE

みやげばなし

# 歐洲から歸つて

萩野伊八

△日本は餘りにも呑氣だ

支那事變の勃發した昭和十二年の正月入蘇以來滿三ヶ年振りで、戰雲あわただしい故國に辿りついた。久し振りで遭ふ同僚舊友等は何れも異口同音に戰爭三ヶ年に及ぶ故國の緊張と努力を傳へて吳れるが永久革命と常時動員の中に絶へず國運の開拓に精進しつゝあるソ聯の大衆生活を視、又第二次歐洲大戰開始前後の東歐、バルカン諸國、獨逸、佛蘭西、英吉利、伊太利さては又蘭印英領海峽殖民地の一部等をめぐつて來た眼から見れば日本は餘りにも呑氣な日常生活に其日暮しをしてゐると云ふ印象を受ける。

勿論戰爭三年で國民の日常生活に相等の不自由を來たしてゐる事の實際を見もし聞きもした。然しソ聯を始め歐洲の交戰國は勿論中立國すらも日常生活の不便さは到底日本の比では無い。ソ聯の大衆生活の不自由さに就いては既に世上幾多の報告と印象が傳へられてゐる通りで今さら小生が呶々する迄も無い。獨逸の國民生活が食糧衣類の極端なる國家統制下にあること、又一般の公衆生活が之れ又死刑を以つて規制せる峻嚴なる規律の下にある事も我國に紹介された處で全く其通りだ。

然らば所謂自由と平等の專賣國みたいに目されてゐる英、佛は如何？日本には英佛の巧妙な宣傳の爲め獨逸やソ聯だけが獨裁で劣惡な經濟生活に國民が喘いでゐるかの如く傳へられてゐるが英、佛だつて夫れに劣らぬ苦しみ方だ。尤も其生活程度の絕對的水準は勿論前者と後者では差違のある事を認めねばならぬ。然し乍ら今回の大戰を擔當する爲めに英國民が負擔する高率の所得稅財產稅の國民生活を壓迫する程度は實に容易ならざるものがある。今後三年間戰爭が繼續するならば、英國の貴族制度は全く危殆に瀕すると斷じ得よう。英吉利に於ける貴族制度の崩壞は獨逸に於けるナチ體制の崩壞と殆んど同じ意義を有するものと云ひ得よう。英藏相サイモンの公表數字は一日の英國の戰費は六百萬磅――一億圓だ。一年間に三百六十五億圓だ。防空作業の爲め倫敦市內の各戶が備へつける砂囊が一個四志――五圓――を要する狀態だ。

更に又一轉して倫敦の街頭へ出て見よう。其所には全く前線と同樣の緊張と防禦が實在する。中心ハイドパークには物凄い迄奇麗にみがかれた高射砲が五門、十門と竝べられて獨機の空襲に備へてゐるのを目の前に見ては如何に貴族人英國民も緊張せざるを得ないではないか、巴里も同樣だ。

何しろ之れ等大陸諸國は日本と異なり戰場が僅か一、二時間にして達せられる處にあるから、戰爭感が痛切に身に迫るから萬止むを得ず斯の如き緊張が强制されるのだ。

△元氣一杯の我社同僚諸君

此戰爭を前にして我が社海外各支局を遍歷各地の諸君が何れも元氣一杯で活躍してゐる事を社の同僚諸君にお傳へ出來ることは嬉しい。

△ワルソウの森元治郎君

未だ陷落前のワルソウで颯爽と乘馬をやり月賦で買つた伊太利製のファイアットを操縱し乍ら、ヴイスツラ河の長堤を上下した事が憶ひ出される。其後戰爭勃發でワルソウ落ちをして、ブカレストへ來たから彼れの自動車は僅か一、二ヶ月分の月賦であとはまる儲けとなつた筈だ。

△伯林の江尻、安達、友村
佐藤の諸君

江尻君は例の重厚な態度でD・N・B・の編輯者に喰ひ下つて通信の改善に努めてゐる。安達君は之れもファイアットを操縱して燕の如きスピードで伯林市內をかけ廻つてゐる。友村君は小生の訪問當時インフルエンザでカイザー・アレー近くの下宿で髭をのばし乍らおちつき拂つてゐた。佐藤君とは遭はずじまい。

△巴里の入江、井上、
本田の諸君

入江君は元來が學者なのだから彼れのフランス語はもう卒業だ。ハヴアスを督勵して朝から夜中迄彼れの「ツマビキ」は有名だ。彼れ曰く、「早く仕事を卒業して日本へ歸つて四疊半で爪彈きを聽きたいものだ云々」と、古野社長以つて安心す可し！小生は井上君の下宿へころげ込んで、彼れと二ヶ月を暮した。彼れは日本料理、フランス料理の天才なる事實を發見した。本田君はコツコツやつてゐる、奧さんを迎へる積りで十六區近くへ備へた勝手道具が無駄になつて氣の毒だ。

△倫敦の長谷川、小寺、河上
久能の諸君

外國へ出て一番あかぬけした者はけだし長谷川君だ。黒のイデン帽に洋傘を以つて颯爽と車を飛ばすあたり昔のおもかげ更に無し、小寺君は昔よりも一層こまめに働いてゐる。シテー方面やピカデリー方面で話す英語をマスターしてゐることは彼れが第一人者だ。河上クラークは默々としてタイプにしがみついてゐる。久能君は着任と同時に家庭教師をやとつて奮發してゐる。

△ローマの下條君

彼れの得意のコクテールを造つてもらつて歐洲最終の一杯をやつた味は未だに忘れられぬ。ヨーロツパで始めて食つたイカの刺身と共に。

△シンガーポールの
小林猪四郎君

恐らく此處はモスコウに次ぐ仕事のやりにくい處と考へてゐたが彼れは意氣軒昂でやつてゐたから諸君幸に安心して下さい。イースタンプレスの相良君、鈴木君も英官憲の重壓下に在つてよく奮鬪してゐる。

△モスクワの久我君

小生の前任地だが、彼れとは事務引き繼ぎで一ヶ月ばかり暮した九江でやられたマラリヤで始めは苦しんでゐたが、ボルシエビーキ相手の仕事には心臟マンは適任だ健鬪を祈る。（二、一三）

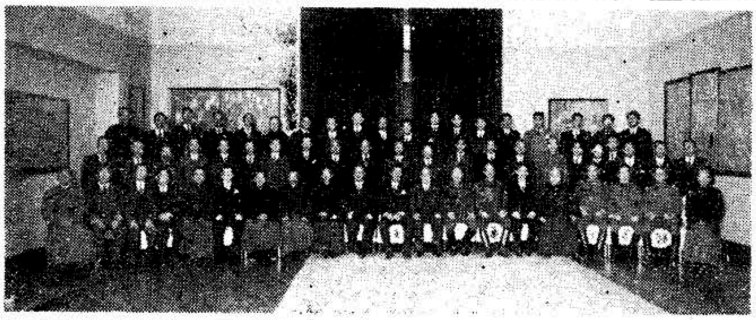
## ひよつこり顏を見せた宇多中尉

應召以來各戰線の第一戰に奮戰し、現に派遣軍總司令部情報部に在つて活躍中の陸軍中尉宇多武次君（本社々會部員）は〇〇日軍裝の儘ひよつこり本社に元氣のよい顏を見せ、同僚諸君からその武運を祝福された。今回は軍の用務で歸國、その寸暇を見て來社したもので用務も濟み〇〇日またも戰地に歸つた。

# 日支要人を招いて

――中聯主催の招待會――

同盟の姉妹會社として中支の華文通信事業に躍進の一途を辿りつゝある『中華聯合通信社』では、昨年末の維新政府議政會議で法律案が通過し、名實共に一本立ちとなり華々しく報道新秩序建設に邁進することになつたのを機に、一月九日南京の東亞俱樂部に日支諸名士要人を招いて、盛大な『招待會』を催した。



當日の出席者は維新政府側から溫立法院長、任綏請部長、廉實業部長、張內政部次長、孔宣傳局長及び高南京市長、張大民會宣傳部長等の要人連に、日本側は總司令部馬淵報道部長、大野部隊長、小山少佐、報道部の宇多中尉（本社々會部員）寺西中尉、堀南京總領事、木內南京放送局長、各新聞社支局長等七十餘名の顏觸れが定刻七時までに會場の大ホールを埋める。開宴前の趣向に同盟映畫ニュース「報道挺身隊」その他數本を映寫する。梁行政院長一行が過般日本訪問の際の實寫、畫面に織り込まれた現代日本の文化施設、わけても素晴らしい重工業の發展ぶりにはあちこちで感嘆の聲が洩れる。同盟製作の『報道挺身隊』があの胸打つリズムをスクリンに畫くと急霰の拍手だ。『いくらこらへても淚が出て仕方なかつた』と報道部の將校が濟んでから泌々述懷。

孔宣傳局長の挨拶に開會、中聯の誕生から今日までの躍進の足跡や將來に亙る活動計畫が詳細に語られたのち『維新政府萬歲』『中聯萬歲』を、一同起つて乾盃して宴に入る。

大ホール舞臺には首都の人氣女優新雲秋一派の艶麗な支那芝居が始まり、方々で賑やかな日支兩語の應酬、文字通り和氣靄々裡に歡を盡して意義深い會を了へたのは十時過ぎであつた。

（寫眞は當日の記念撮影、前列向つて右から寺西中尉、宇多中尉小山少佐、貴會計司長、孔宣傳局長、大野部隊長、馬淵報道部長溫院長、堀總領事、任綏請部長廉實業部長、行政院秘書長、高南京市長、張內政部次長、一人置いて張大民會宣傳部長、一人置いて米大民會總務部長、木內南京放送局長）

新聞通信調査会 JAPAN PRESS RESEARCH INSTITUTE

# 減頁とニュース整理

山口巖

新聞の減頁は社會的に大きな波紋を投げて居る。特に同盟に對しては深刻なる影響を及ぼしつゝある。吾々としては同盟の使命に鑑み如何に善處するか——思ひを潜めばニュース取扱ひの根本認識から問題となつて來る。

**一、十五段制實施**

用紙制限の結果として全國新聞社は餘儀なくも減頁を斷行せざるを得なくなつた。然し讀者に、國民に報導すべきニュースは益々増加するばかりである。そこで考へられたことが一頁十五段制の實施となつて現はれて來た。即ち從來の十二頁を十頁に減らしても内容は從前通りの記事收容量を持たせようと云ふ所に苦心がある。一例を岡山の合同新聞にとると新活字に依る十五段制に依り從來の一段百六十三行は百七十五行となつて十二行を増加し且つ一段増加のため一頁について三百四十三行即ち十二頁新聞に於ては四千百十六行を増加——凡そ二頁だけ頁數を増加したと同じ結果になるのである。從つて三月一日から十頁になつても十四段制十二頁當時と殆んど差違の無い記事收容量を維持すると云ふのであるが、この傾向は今や全國的となりつゝあつて同盟ニュース配信上からは特に注意を要するところである。

**二、減頁の效果**

十五段制八頁、十頁又は十二頁と壓縮された各新聞を見た感じは活字が小さくなつて讀み難くはなつた樣であるがニュース量は決して減つてはゐない。寧ろ限られた紙面を如何に有效に使用するかと云ふ本質的な研究に立ち至つたかの如くで、見出し、内容整理、頁全體の調子共に苦心の跡歴然たるものがあり、それだけに緊張した紙面を作製しつゝある樣に思へる。特に見出しと内容の檢討、整理が眞劒になつて來た事が感ぜられる。即ち新聞社は用紙制減に對しても以上の如き研究と努力とに依つて國民に、讀者にニュースの不足を感ぜしめぬ樣に困難を克服しつゝあるのである。然しながら用紙制限は武藤貞一氏(大阪時事)の提唱するが如く戰時下八頁建迄行かぬとは何人も斷言し得ない。

**三、整理の再吟味**

用紙制限は唯に新聞社だけの問題ではなく同盟とても同樣の制限下にある。即ち、通信用紙、速記用紙等の用紙は同盟全支社局を綜合すると眞に夥しき數量に上るのである。同盟としては各社に對し詳細を極めたニュースと完備した印刷(タイプ)通信を供給するに越した事はないが戰時下に於ては左樣なことは昔の贅澤となりつゝあるのである。從つて同盟としてはニュースの整理、配信に當つて更に一段の研究と努力とを必要とする。地方新聞社出向社員制度を實施した一因も亦茲に存するのである。即ち限られた紙面を最も有效に活用するためには同盟ニュースの整理は更に充分吟味されねばならぬ。ニュースが適時、適性、適量なりや否やについては受信新聞社の赤裸の批判に待たねばならぬ。この地方の鞭と聲とは必ず地方支社局に依つて本社へ傳達さるべきであるが、この事甚だ尠きは吾々の最も遺憾とするところである。

△　△　△

我が同盟は國際思想戰の第一線に活躍死闘を續けてゐるものであるが、これを必勝に導くものは國論の統一である。國論の統一は最高の戰力と盛なる士氣を喚起するが、この根源をなすものは國家と共に生きるニュースである。ニュース整理の至難なるはこの故であると共に用紙制限下の紙面製作の苦心も亦ここに存するのであるが我等が整理と配信の結果を、その反響を重視し地方の鞭と聲とを翹望する所以も亦一に此の理由に據るのである。

全國新聞のニュースは過半同盟ニュースを以て埋められる。從つて同盟は意識、無意識に拘はらず國論統一の作用をなしつゝあるものとも斷ぜられるのであるから、内外ニュースの取材、整理、配信に當つては特に愼重戒心を必要とする。即ち同盟が外部に發表するニュースは常に最高戰力を發揮せしめる事を目標として進むべきであることは言ふ迄もない。

## 中島曹長戰線から

〇〇戰線に活躍中の中島幸基曹長から我が社無電にて古野社長以下社員一同宛に左の如き便りがあつた。

×　×

邊疆の戰線に在る小生に迄何時も御高配を賜はり感激の至りです。お蔭を以つて益々元氣で闘ひつゝけてゐます。今度は仲々爽決な戰闘でありました。〇〇特派の各班各員にもお目にかゝり、その活躍ぶりを親しく拜見しました。御厄介にもなりました。

北に南に皇軍の進むところ同盟旗の翻るを見て愉快でなりません早く此の旗の下で働き度いと思ひます。社運の御隆昌、皆樣の御健康を遥かに御祈り申上げます。

二月十三日〇〇に於て　中島幸基

## 支局だより

### 宮崎武道大會

鹿兒島支局　M生

某々社ともに常置支局員三名に加へて、數名の應援社員を特派して待機してゐるのに對し、當方は囑託通信員一名に鹿兒島支局から一名派遣の陣容で、相當面白いたたかひをやつた。試合場からこちらの聯絡基地宮崎新聞社までの原稿送達さへうまくゆけば、勝てる自信ははじめから持つてゐた。

同地の宮崎新聞は社の全機能をあげて同盟に協力を惜しまなかつた。即ち

(1) 同社員を一名我社派遣記者の傍に常置して戰況を筆記さしてくれた(戰況はめまぐるしく變化して一人は口述のみ一人は筆記に專念せねばならぬ狀態であつた)。

(2) 試合場から新聞社までの聯絡に同社雇員を數名配置して一時間毎に原稿のリレーをやつて貰つた。

(3) 新聞社に原稿がつくやいなや同社編輯長や速記者が當支局へ急報で送信に當られた。

(4) 寫眞入手に當つても全幅の支援を仰いだ……かくて鹿兒島支局にドシ〱原稿が運ばれ、それから先はモウこつちのもの。地方部から『努力を謝す』の結果となつて現はれたのであるが、この成果は宮崎新聞の協力がなければ決して擧げ得られるものではない。茲に改めて滿腔の謝意を表すものである。

## 霧ケ峯に描く複雜怪奇なシュプール

——運動部恒例の擧行——

ウインタースポーツの一段落に暇を見出した運動部は恒例によつて消耗した體力の補及を信門霧ケ峰スキー場に求めた。

去月二十七日夜十一時二十分といつた集合時刻は同五十五分といふ發車時間を見越して到つて集りは惡い。殊に御大秋山部長の突發的不參加は傘のつるを失つたにも等しく一同いさゝか愁歎にくれる。けれどもそれも僅か一時！列車中の歡談に初まり上諏訪到着後、藤原君の御宅布半別莊にくつろいだ快適の朝湯に霧消して午前十時上諏訪發のバスに乘つてからといふものは久振りに見る白雪に又峨々たる山蓉に話しはゝづんでまるでバスを貸切つた樣な騷ぎ。この騷ぎは清水橋でバスを棄てゝ緩斜面の登攀まで續いたが、扨て五十米前後續いた急登攀に到るや早くも根をあげたのがハワイ生れでこんな雪を見るのが初めてといふ本田君、野球の第一人者も勝手違ひの雪上では青息吐息！

一望白雪の曠野！　粉雪を思はせる快適の雪質！　萬端おあつらへ向きの霧ケ峰スロープは凡ての凡惱を蹴飛すに充分だつた。

歸路、池のくるみから清水橋まで續く七廻りの難所ではスキーを谷間に飛して危くバスに乘遲れそうになつた山東君、二十數回の轉倒に全身を雪まぶれにした本田君の苦闘など、殘念ながら紙數の關係で語り盡せない。だが、根がスポーツで鍛へた一同、一風呂浴るとピンポンに撞球に旅館の娛樂室を獨占して大騷ぎ、中でも野崎、川本兩君は明朝はスケートをやるんだと、夜は諏訪湖に水撒きに行く有樣。

第二日、小島さんの參加に一人增へると思つたら本田君がへばつて同勢九人、グライダー小屋から池のくるみの急滑降を見事なシュプールにさすがと思はせる野崎君の美技やら轉倒振りも板についた山東君、扨ては川本、藤原兩君の廻轉技術、この日も又多くの收穫に賑つた。

## 外信部チーム制覇の第一歩

我外信部は陽春の訪れに魁けて野球チームを編成、先づ第一戰は二月廿六日(月)午後二時から虎ノ門都市遞信局グラウンドに於て滿鐵東京支社軍と相見え、十三對八のスコアで快勝した。當日の外信部ナイン。

(左　)蠟山
(投、遊、投)高田
(三　)山崎
(二、投、二)石井
(一　)大橋
(遊、二、遊)長谷川
(捕　)津田、山崎
(中　)松山
(右　)岩本、水野
監督　岩本
主將　津田

當日のスコア

| | | 滿鐵 |
|---|---|---|
| 一 | 3 | 1 |
| 二 | 2 | 0 |
| 三 | 1 | 1 |
| 四 | 5 | 0 |
| 五 | 2 | 4 |
| 六 | 0 | 0 |
| 七 | A | 2 |
| 計 | 13A | 8 |

スコアの示す如く、滿鐵軍の先攻に試合開始、滿鐵軍先づ一點を先取して氣を良くしたが、その裏外信バッター快打連續、堂々三點を返し、各回得點四回には五點の大量得點を擧げて一一對二といふ大差を以て試合を一方的ならしめた。五回に我第二陣選手の出場で滿鐵は四點氣をり返したが、時既に遲く、信外部は堂々と押切つて凱を奏した。

斯く美事なスタートを切つた外信部チームは意氣軒昂、更に社内制覇を目指して社内各部の挑戰を待つてゐる。(H・T記)

新聞通信調査会
JAPAN PRESS RESEARCH INSTITUTE

# 雪の札幌

## 大倉山轉んで起きる雪だるま

——建國スキー大會——

白皚々の雪に覆はれた札幌にも意義深い二千六百年、紀元の佳節はやつて來た。

二月十一日、この佳き日を聖戰下第四年に迎へた幌都は、サラリーマンに、官公吏、學生の殆んど全部を擧けて奉祝と體位向上を目指して或はスキーに、或はスケートに各種の催しが行はれ正に絢爛たる寒國の一大繪卷が繰り展げられた。この間に伍してわが札幌支局でも、出番の諸君を除いて總勢十一名、雄々しくも建國スキー大會を擧行した。

×　×　×

會場は、名だたる大倉山シヤンツエを中心とする附近山麓一帶—といふのは少し大袈裟である—實はそのほんの一部分のさゝやかなゲレンデなのである。だが、雲間より洩れる陽光は、終日銀雪に映へて、紅潮させた頰に支局長以下われらが支局員一同の意氣大に昂つた。

軈て展開される熱戰を偲びつゝ悠々晝食を濟ます。氣溫は零下四度、無風。雪質上々、絶好のコンデイションである。午後一時、一同嚴肅なる皇居遙拜あつて愈よ、競技は滑降レースより幕を切つて落した。

×　×　×

コース百米、相當急激なスロープである。先づ、レースの模樣をアナウンスする。

支局長の審判は愼重、サッと上つた日の丸の旗、第一滑走者T選手スタートしました。物凄いスピード、スキーの下から火花が出てゐるやうです。そのため、シュプールの邊りは雪が解けそうです。〃只今のタイム十秒フラット〃——素晴らしい好記錄です。昨年の〇〇の樹立せる日本新記錄を遙かに破つて……と言ひたいところです。續くY、H……と各選手何れも好タイム。

次はC級との定評ある第五走者、觀衆はいつ轉ぶかと、片唾を呑んで見守つてゐます。第五走者スタート、あゝ轉びました、期待に違はず出發直後二米の地點で早くも轉びました。『その儘轉んで來た方が早いぞウ』と誰かが彌次つてゐますが、選手は眞劍、懸命に起ち上つて滑り出しました。呀ッ、また轉びました(ドット湧く觀衆の笑聲)雪の白粉を一杯塗つてやをら擡げた顏は『わしの顏は文字通り丸潰れや』といつた表情です。大きな穴が二ッ出來て、次の走者の不利が豫想されます。思ひなしか第六走者M君の頰は不安な表情が漂つてゐます。だが、豫想を裏切つて見事に惡條件を克服、而も好タイムを出したのは流石道產見といへませう。

斯くて好タイム續出、のみならず、九秒の同タイム三人の決勝爭ひとまでなり、競技は愈よ白熱化してゆく——。

×　×　×

次は廻轉競技で、豆選手の活躍や、おカマ制動、顏面制動などの珍技演出に、人も山も樹も雪も、崩れんばかり抱腹絶倒の場面を續出したが、「秘密會」、「速記中止」といふことにして——、それから競技は、旗取競爭に移り、最後に本大會の呼物二百米リレーへと進む。即ち、A、B、Cと三組に分れ一組三人宛のリレーは、本大會の棹尾を飾るに相應しくまことに壯觀たるものがあつた。殊にB組二番走者Y君の頑張りは、常に支局隨一のへッぴり腰選手として自他ともに許してゐただけに、そのダークホース振りは刮目に價ひし特筆大書さるべきであつた。そして結論はY君をメンベーに加へるB組が優勝したことは勿論だ。

×　×　×

暮れるに早い北國の靜かな夕陽が手稻や盤溪の山々にやはらかい光を投げかける頃、盛會裡に本大會の幕は閉じられた。

聖戰下而も紀元の佳節に斯くて意義深い一日を愉快に滑り、そして顚ろび、明日への力強い戰ひに更に英氣を養ひ得たことを心から喜ぶと共に、大陸の第一線に、そして銃後に、日夜活躍する我等二千五百の盟友へのレポとしてこの大會記をおくる。(カットは雪の猛者連)

# 專用線の鼓動(三)

## 朝鮮の動脈は太い

京城支局

興亞維新に綽々たる布陣を見せて堂々出現した同盟大陸專用線は大陸日本の生命の源泉であり、我が半島の大動脈である。凡そ近代人の生活に潑溂たる生氣を與へるものは朝飯前の、或は一日の職場を離れてから無意識に手にした瞬間のニュースの淸新さである。これが近代文化の何よりもの饗宴であり、凉涼劑であり我々の氣力の源泉でもある。飛躍する半島の各部門は不知不識にこの呼吸に伸びて往く。

大陸專用線開通の十月一日以來の全鮮二十餘を一新した。『ほんとうに東京、大阪の一流紙と何んの遜色もない』これが朝鮮での一般讀者の聲である。

×　×

半島の生命の源泉、同盟大陸線が重機關銃のやうに京城支局に据付られてから八方に擊ち出すニュースの彈丸は全く物凄いものである。

試みに專用線開通後の綜合實績を一瞥すれば、約系通話時代に比し毎月約五割六分の增加で即ち二ヶ月分を一ヶ月で捌いてゐる勘定である。而も量が增へたばかりではなく、敏速で質もよくなつてゐる。

×　×

武器が良ければ射手の張り切り方も違ふ。支局長總指揮下總員七十八名のスクラムは愈々堅い。編輯、通信商況の機構も整備された。專用線係の速記者陣營も從來の四人から一躍して九人編成となつた。これに伴ふ編輯陣も完璧を期してゐる。同盟が張り切れば自然地元新聞にも反映する。京城府內の各新聞は最初朝刊締切を午後十一時から午前零時に延長することにしたが最近では實際のところ午前一時乃至二時頃まで締切を延長して重要ニュースを織り込もうとして懸命になつてゐる。之によつても如何に大陸專用線が我が半島の新聞界を覺醒せしめ、緊張せしめ、飛躍せしめたかその片鱗が窺へよう。全く半島の言論界に一大劃期を作つたのである。

×　×

朝鮮といへば東京にゐる人は一道か一府縣の樣に考へてゐるかも知れないが、實は朝鮮の端から端まで行くには、內地の靑森から下關まで位の時間を要する。それが當支局の責任區域である。此の廣い區域に散在する二十幾社の新聞に、丁度本社から靑森、下關其の他全國各地の支社局にニュースを送るのと同じ樣に、或は淸津へ、或は新義州へ、木浦へ、鎭南浦へと豫約電話、豫約電報等で一刻も遲れまじとニュースの砲彈を飛ばすのである。夕刊締切り時等の編輯室は全く戰爭そのものである。然し愉快だ。新銳なる武器の威力、社員一致協力の力、勞苦も空腹も感じない。只感激あるのみだ。あゝ熱い血潮が唸る大陸專用線。興亞の大動脈。日本と滿洲、何れは滿洲から支那へ。伸び行く大同盟の姿そのものの樣に。その要路を築く我が京城支局だ。大陸進出兵站基地としての半島、そして其の心臟部の京城。一同大なる自負を以て大いに頑張れだ。

×　×

我が京城支局の施設は更に國內無電放送の受信設備も出來て目下テスト中であり。電送寫眞も愈々工事完成した。總てが半島最初の企圖である。全く脅威的躍進だ。見よ、これでもか〳〵とぐん〳〵伸びる半島各部門の飛躍的姿を。(了)

# 北陸文化の尖端

金澤支局

昭和十三年四月一日、花信チラホラと臻る此の日、多年の宿望が成つて大阪—福井—金澤間に同盟專用線が架けられてから早くも二歳に達せんとして居る。

×　×

抑々、地方人は動もすれば「通信社」と云へば所謂新聞社の「椽の下の力持」的役割としか解せず、其の事業の眞意義を認識しないものが多かつたが、大同盟の出現につぐ專用線の架設で、之等地方人に漸次「同盟」の何たるかを認識されつゝあるのは洵に欣快極まることである。由來當地方は地理的關係上、大朝、大毎の進出は地元各紙の頭痛の種で

あり、何等かの對策を講ずることが、もつとも緊要とされて居つたのであるから、我が同盟専用線の開通に依つて享ける利益は蓋し大なるものがあり、茲において北國北毎の二大社が直に従來の締切時間の繰下を斷行したことも當然の結果である。

× ×

専用線開通最初の殊勳ーと云ふか、遺憾なく其の機能を發揮したのは開通日も淺い四月二十三日の支那事變第一回論功行賞の發表である、午後八時過ぎより深更午前二時半に至る六時間餘、當地方關係者のみとは云へ、彼の尨大な奴を息もつがせずキャッチし得たのは全く専用線のお蔭で、我々支局員に始めて其の絶大なる偉力を認識させたものである。引續いて天長の佳辰を期して決行され敵機五十一機を撃墜した我が海鷲の漢口大爆撃、五月の徐州大會戰につぐ其の陥落、數次に亙る近衞内閣の改造、七月に入つて張鼓峰事件の勃發、ソ聯機の大量撃墜等々、其の效果は將に百パーセントである。更に此の年九月六日午前零時二十分、富山縣氷見町に起つた大火、全町三千四百戸の中、其の半ば千五百餘戸を烏有に歸した地方重要ニュースもまた専用線に乘つて瞬時にして大阪に送信されて居る。此の頃よりチェッコ問題、ズデーテン地方の獨逸返還問題等を廻る歐洲情勢の緊迫化あり、十月二十七日の武漢三鎭陥落の同盟ニュースは斷然大朝大毎を抑へて我が地方紙に凱歌を奏せしめた。十四年に入つて未だ屠蘇の香に醉ふ一月四日の近衞内閣總辭職、平沼内閣の成立、三月二日の内親王樣御誕生、五月のノモンハン大空中戰、六月半ばの天津英佛租界封鎖、七月三日のソ滿國境猛撃等何れも大阪紙を壓して居る、更に八月二十八日の平沼内閣の瓦壊から、阿部大將に大命降下して我が郷土内閣の出現ー茲に専用線の偉力は遺憾なく發揮され正にヒット・ヒットの連續である。越えて九月三日チェンバレン英首相の對獨宣戰布告の飛電あり、舊臘からぐら付き出して遂に阿部郷土内閣の瓦解ー七十萬縣民の耳目は一齊に活字の上に注がれる。しかも此の重要ニュースこそは、我々の耳朶を通じて一本の専用線から脈々と流れ出る「鼓動」となつて些かの遲滯もなく各社へリレーされて行くのである。

× ×

一方、本年より姉妹社商通が合併されて、茲に名實ともに大同盟の面目を整へ、二十一個の卓上電話より市内二十七のお得意へ放送される少年少女の經濟アナウンスの聲は將に市場の活氣をそのまま此處に反映して壯觀の極みである。

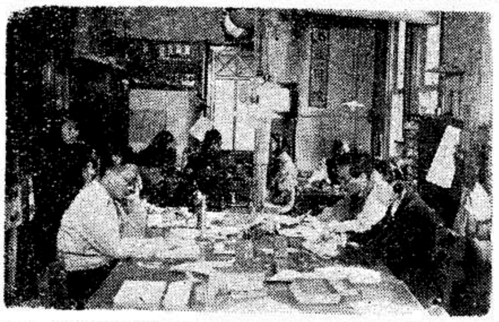
おゝー専用線の鼓動ー専用線の鼓動ー

内外の時局、日々刻々多端を加へ、我が大同盟の使命、またますます重きを加へつゝあるとき、北陸文化の尖端を行く我等一意專心此の重大任務の遂行に直往邁進せんことを誓ふものである。（酒井生）

# 百三つのトンネルを潜つて

## 高知支局

百三つのトンネルを四國山脈の背中にくゞつて急に空が高くなつたと思ふと、もうそこは南海の土佐である、或ひは闇の中に淡路島を右手に感じ、太平洋の入口をすぐ西に廻つて室戸岬の燈臺の點滅する明りを目の前に見て太平洋の荒波に船が走るともう土佐の高知である。



× ×

高知と言へば今次事變で勇名をとゞろかした和知部隊、敵前上陸の土佐健兒と共に誰もがあの、昭和十二年五月二十六日の夕方の出來事を思ひ返して貰へるだらう、パリー、東京百時間飛行のマルセル・ドレー、フランソア・クサヴィニ・ミケレッチのコードロン・シムーン機が壯途空しく戸原海岸に不時着、落雷の如き大音響と共にもんどり打つて眞逆樣になつた大破の機體を波打際にさらした日のことをである、高知といふところはその時にやつと「戸原海岸」といふ固有名詞と共に全日本といふよりも全世界の人々の耳に響いたところである。

× ×

昭和十二年一月一日、同盟誕生一年後のこの日半年前に生れ出た高知同盟は現在の高知新聞社二階に移り一段と充實されたのであつたがその年四月には岡山、高知二一八粁の専用電話が開通續いて五月には電送寫眞設備も整ひ、高知の新聞街は目まぐるしいまでに活潑に動きはじめた、さうしてその月五月二十六日には戸原海岸は一躍専用線におどり出て世界に放送された、高知の支局にとつてはこれは何よりの第一の試錬であつたし支局史の記念すべき日であつた。そして七月七日蘆溝橋事件は更に遺憾なく二十四時間撃きつ放しの同盟専用線の威力を發揮し直截明快な「生のニュース」は寫眞電送と共に全縣下七十餘萬の國民の耳目に怒濤の如くたゝいて、その年三月三十一日、二十七億の明年度豫算を一呑みにして、ほつとする間もなく「政黨の反省を促す」と解散した林内閣の第七十議會を四十八通話の岡山、高知の豫約でぎゆう／＼言つて通したのも明ければ四月一日からの同盟専用線といふ華々しき姿であつた。

× ×

次々に生起し傳へられる世界の鼓動を専用線の鼓動にぴつたり合せて、今、南海の土佐に神經をとがらし六千餘粁同盟専用線の一翼に立つ同盟・高知の姿に我々は若き感激を覺へずにはゐられない、大同結盟、新しき地方部の使命を擔つて今や事變第四年、我々の職責に感激を新たにして南海の土佐にそのパートをまもるだらう。（岡松記）

# 金比羅樣と専用線

## 高松支局

待望久しかつた岡山高松高知間専用線が開通されたのは昭和十二年三月、この春をもつて滿三年、期せずして意義深い興亞の聖戰と同齢を重ねる事になる。皇軍進撃の目覺しさにも比すべきこの専用線の文化開發の上に印した巨歩は劃期的大收穫といふべきである。それが開通前までは岡山との間に一日數十通話の豫約を持つに過ぎず、猫眼さながらの世相を報ずるには隔靴掻痒の憾なきを得ず、轉た髀肉を歎じつゝその歴史の朝の訪れをどんなに待望したことであらうか。

× ×

あゝ遂に長夜は明けて愈々開通、我等支局員一同この裡かしい大使命の一翼たる光榮に感激また感激、相次いでぶつ放す同盟ニュースの巨彈の威力に今更ながらその使命の重大さを痛感しつゝある時、偶々日支事變の勃發に際會、ここぞと皇軍の赫々たる戰果を怒濤の樣な進撃を分秒の遲滯なく、滿身これ耳の軍都に刻々報じてその渇望を完全に醫し絶大の反響を呼んだ。

× ×

その間國内の政變幾たび平沼、阿部、今また米内と各内閣の慌しい政局の轉換、歐洲第二次大戰の突發するや刻々移り行く複雜微妙の戰局等々、まさに一觸即發餘すところなき完璧の報道は、權威同盟の聲價を彌が上にも昂揚せしめずには措かない。かくて専用線の出現こそ獨り當地新聞界のためのみならず地方文化の開發に一新紀元を劃したものでそのあらたかさは金比羅さんの御利益にも敢て劣らじと自負する所以である。

× ×

今や興亞の大聖業着々として遂行され新秩序建設その緒につかんとする時、我等榮ある報道戰士は同盟の大使命達成に更に緊褌一番、専用線運用の萬全を期しその本領發揮と直往邁進を誓つて感激更に新なるものがある。（有木生）

# 互助會報告（二月）

**結婚**

桑野　茂（本社總務部）
芦部　茂男（同寫眞部）
伊藤　兵衞（同出版部）
寺崎　鐵男（同特信部）
飯塚　昭二（同外信部）
吉田哲次郎（臺北支局）
齋藤　孝二（名古屋支社）
平山　登（南京支局）

**出生**

大村　泰三（本社運動部）第一子
永由　君人（同社會部）第三子
林　曄道（同映畫部）第一子
高木　一實（同滿洲部）第四子
永見　寅太（同經濟務）第三子
一條　重一（同調査部）第二子
小笠原　進（同寫眞部）第一子
羽入　義夫（札幌支局）第一子
島田　茂明（富山支局）第一子
吉村　榮吉（關門支社）第二子
李　水樹（臺北支局）第二子
岸本　幸吉（大阪支局）第一子
吉田　良好（和歌山支局）第七子
山崎　良夫（福岡支社）第三子
近藤　公一（大阪支局）第三子
長谷川　朝二（福岡支社）第四子
吉井　政司（南京支局）女子

**見舞**

荻原　榮治（本社放送部）長男入院
宮田季四郎（同地方部）病氣
西澤　幸男（同　上）同
中島　末吉（同滿洲部）同
猿橋　進（福岡支社）同
上杉　憲治（熊本支局）同
小沼　章（京城支局）同
高橋　謙吉（大分支局）三男入院
村山　光雄（熊本支局）病氣
龜井光太郎（京城支局）同

新聞通信調査会 JAPAN PRESS RESEARCH INSTITUTE

## 弔慰

齋藤　直吉（本社經理部）實父死去
塚本　義隆（本社經濟局）實父死去
貞光八千代（横濱支局）實祖父死去
高羽　敏是（大阪支社）二男死去
泉　清一（關門支社）實祖父死去
村山　光雄（熊本支局）實母死去
濱崎ミドリ（大阪支社）實兄死去
小池　章（京城支局）二男死去
富田　俊雄（南京支局）實父死去

## 入營ト應召

山田　禮三（本社東亞部）入營
木谷德三郎（同調査部）同
下平　孝吉（同政治部）同
飯塚　昭二（同外信部）應召
今井　至郎（岡山支局）入營

## 退社

田島　泰平（北支總局華文部）
高　福壽（京城支局）
胡田　吉通（神戸支局）
大川　半藏（横濱支局）
青野　義雄（大阪支社）
岩本喜久枝（同　上）
佐藤　友三（同　上）
青木　時江（名古屋支社）
竹村謙一郎（福岡支社）
田島　恭平（北支總局華文部）

# 同盟人事

（一、二〇―二、二一）

命社員、總務局勤務
小杉　純三郎
氷見　寅太
布浦　富美子
松田　智
瀨下　定枝
井上　夫佐子

命准社員、總務局勤務
長林　密藏
伊藤　重雄
村田　庄太郎
小野　勝三郎
多門　正吉
山岡　勘三郎
平山　宗兵衛
高橋　與三治
久保田　幸次郎
北村　進

命社員、經濟局勤務
大野　千賀子
大倉　旭
三枝　治市郎
松尾　精吉
宮城　淸
酒井　忠男
西村　乘次郎
諸橋　開平
新山　倉治

命准社員、經濟局勤務
山合　榛名
入交　貞
高橋　順子
中村　精之
齋藤　茂雄
水落　茂
中田　實
鈴木　孝省
川村　アツ
角　智惠子
野口　ハル
今井　よし子
中島　菊作
遠藤　雅子
岡田　朝雄
中村　利直

准社員試用、經濟局勤務
三枝　篤實
森　莊三

經濟局事務囑託
松野　喜作
山片　紀雄
赤星　勝夫
木原　禮二
伯井　芳
末松　房太郎
豐住　吉之助

命社員、大阪支社勤務
片岡　さかゑ
尾板　忠康
一ノ瀨　ヨシ子
猿田　安美
近藤　龍

命准社員、大阪支社勤務
大井　脩

准社員試用、大阪支社勤務
水谷　安左衛門

命社員、名古屋支社勤務
川瀨　定司

命准社員、名古屋支社勤務

命社員、關門支社經濟主任
山崎　一三

山本　啓式
中谷　政雄

命社員、關門支社勤務
大梅　實
大宮　康男
倉本　千江子
關森　シゲ
福田　武雄
納　節子

命准社員、關門支社勤務
山崎　良夫

命社員、福岡支社勤務
出田　浩
岡崎　保
下川　深

社員試用、福岡支社勤務
桐生支局長事務囑託

命社員、桐生支局主任
古川　貞市

金井　亥嘉造
村瀨　諭吉
早苗　文子
前原　靜江

命准社員、桐生支局勤務
足利支局長事務囑託

命社員、足利支局主任
永田　武秋

河村　廣
阿部　濱子

命准社員、足利支局勤務
宮田　金八
蘭　安之助
中村　實
坂東　太郎

命社員、横濱支局勤務
蘭　二郎
岩邊　高雄
堀内　濱之助

命准社員、横濱支局勤務
菊池　源助

横濱支局事務囑託
豐橋支局主任事務囑託
久原　育男

命社員、豐橋支局主任
岡本　絹子
黒川　錫二

命准社員、豐橋支局勤務
水野　靖彦
吉川　吉夫

命社員、新潟支局勤務
本田　トヨ

命准社員、新潟支局勤務
岡谷支局長事務囑託
兼松本支局長事務囑託

命社員、岡谷支局主任
兼松本支局主任
今井　政吉

渡邊　皖
今井　博
法領田　亮一
増澤　基弘
細木　義親

命准社員、岡谷支局勤務
今井　幹泰

命准社員、松本支局勤務
山本　淸造

命社員、金澤支局勤務
福井支局長事務囑託
青木　榮次郎

命社員、福井支局長
福井　誠正
田次　泰吉
三仙　交三
菅原　佐敏
松浦　正直
沖　篤
牧野　幸

命社員、福井支局勤務
野路　すなを
野坂　實

命准社員、福井支社勤務
岩村　繁雄

命准社員、京都支局勤務
柴山　善一郎

命社員、神戸支局勤務
德永　丈助
鈴木　正已
内山　弘

命准社員、神戸支局勤務
岡本　輝麿

命社員、廣島支局勤務
高橋　謹爾
任谷　新市
金田　勇
柳川　義夫

命社員、釜山支局勤務
松本　美代子
山本　美知子
李　東基

命准社員、釜山支局勤務

命社員、經濟局參事
山本　滋雄

西本　量一
小倉　彰
小西　善三
金　正祿
石出　茂
杉山　賀一
元　瓊洙
寺師　宗弘

命社員、京城支局勤務
川合　正憲
岩本　ミヤコ
中山　一稔
尾中　一夫
南部　武夫
金　栢熵
降旗　和子
李　敬男
吳　仁善

命准社員、京城支局勤務
合志　廣吉

社員試用、京城支局勤務
元永　茂夫

命准社員、京城支局勤務（但大邱駐在）
景浦　敏子

命准社員、京城支局勤務、（但仁川駐在）
中本　正之

京城支局事務囑託（但仁川駐在）
任　健彬

命社員、京城支局勤務（但群山駐在）
鄭　錫虎

命准社員、京城支局勤務（但群山駐在）
大石　勘之助

命社員、京城支局勤務（但木浦駐在）

經濟局外經部休職社員
戸澤　隆二

命復職、北支總局勤務
平田　新六
佐藤　武久

命准社員、總局局經理部勤務
松永　一夫

同、同上出版部勤務
前田　淸

同、編輯局勤務
川和　龍太郎

遠藤　政雄
多久　治雄
神山　謙介
澤田　政雄
中島　康晴

同、通信局整理部勤務
寺田　武男

同、同上放送部勤務
戸塚　一郎

同、同上英文部勤務
津田　重藏
片山　政春
荒井　清
福永　ふさゑ
藤林　かずゑ
木島　時子
安藤　德子
宮本　八枝子
濱崎　ミドリ

同、大阪支社勤務
中野　さだ
渡邊　勝義
松浦　宥一
酒井　大
青木　時江

同、名古屋支社勤務
久原　一馬
平西　朝子

同、關門支社勤務
山下　フクチヨ
福永　陽三
藏田　學人

同、福岡支社勤務
早瀨　德正

同、函館支局勤務
小野　喜一郎

同、横濱支局勤務
小林　秀吉

同、金澤支局勤務
福島　弘士

同、岡山支局勤務
鈴木　壽枝子

同、松山支局勤務
北野　司

同、高知支局勤務
木下　國弘

同、大分支局勤務
佐原　治平
宮崎　ミサ子

同、長崎支局勤務
揚竹　五郎

新聞通信調査会 JAPAN PRESS RESEARCH INSTITUTE

同、臺北支局勤務　權泰善
同、京城支局勤務　松尾次雄
鄭順道
同、天津支局勤務　金鉉恩
同、石門支局勤務　西田三二
同、保定支局勤務　金翰基
同、開封支局勤務
總務局庶務部准社員　小林春子
同　出版部同　仲功
編輯局社會部社員試用　尾高晃
同　杉本恒彥
寫眞部准社員　宗久仁
同　石井周治
同　中村寓八郎
同　富田三郎
通信部整理部同　代田八千雄
同　地方部同　早川仁三
同　岩本正太郎
同　岩井五郎
同　津田豐人
同　前島まき
同　深谷とく
同　放送部同　原進一
同　發送部同　大村德太郎
同　技術部同　三宅敬
同　山本保彥
經濟局外經部同　香中大二郎
同　商況部同　齋藤東八
同　望月七郎
同　小川隆康
同　志村秀三
北支總局同　小宮賴平
同　藤原元一
同　田中一雄
同　三枝政則
大阪支社同　耗田義一
同　瀨戶晋
同　松元重春
同　內海裕土士
同　蟻正育能
同　宮宇地武男
名古屋支社同　勝尾信一
同　菅野浩歌
同　深津太郎
同　邊渡多喜男

同　伊藤峰子
同　木田秀光
福岡支社同　矢野元
同　山中左六
橫濱支局同　丸山三郎
神戶支局同　廣瀨勘次
同　東英敏
臺北支局同　松尾正己
京城支局同　田中隆司
社員ヲ命ス(各通)
**編輯局長　松本重治**
**中南支へ出張ヲ命ス**
編輯局社會部勤務社員　**高雄辰馬**
**命編輯局社會部次長**
**北支總局英文部次長　三輪武久**
**命北支總局英文部長**
**北支總局英文部長　渡邊純一**
**命總務局勤務(部長待遇)**
**天津支局英文主任　牧內正男**
總務局勤務
總務局經理部勤務社員　藤崎一信
總務局勤務
總務局映畫部勤務社員　黑川時雄
同准社員　酒島哲郎
同同盟講習所勤務社員　坂卷三郎
編輯局勤務准社員　鈴木鐵男
同政治部勤務社員　岡田博
同　山本利
同社員試用　明峰嘉夫
同經濟部勤務社員　中村信
同　布浦芳郎
同　永山公明
同　門脇誠
同社會部勤務社員　宇多武次
同　永井晥
同　松邑誠實
同　村上定一
同　若杉修介
同　野田秀春
同　高見正道
同准社員　寺原秀正
同運動部勤務社員　菅沼俊哉
同　村田篤

同東亞部勤務社員　山出實
同特信部勤務社員　寺崎鐵男
同調査部勤務社員　木谷德三郎
同寫眞部勤務社員　祓川親茂
同准社員　喜多原星郎
同寫眞部勤務准社員　內山佐五兵衛
同　井內信次
同准社員試用　高井實
通信局整理部勤務社員　松本金吉
同　馬島勇
同准社員　鈴木啓造
同　中島幸基
同地方部勤務社員　富田市之進
同　清水一
同　岩井五郎
同　岩本正太郎
同准社員　玉井靖
同　齋藤淸
同放送部勤務准社員　松尾武一
同發送部勤務准社員　鈴木進
同　中川孝
同　駒谷朝則
同技術部勤務社員　白石覺
同　津田章
同技術部勤務社員　渡邊公身
經濟局外經部勤務社員　大橋博
同商況部勤務社員　志村秀三
同准社員　澤村三樹郎
同　田中政雄
總部局勤務(各通)
杉山清太郎
總務局同盟講習所事務囑託
小栗周三郎
通信局整理部勤務社員
編輯局政治部勤務
川村アツ
經濟局勤務准社員
編輯局特信部勤務
粂岩鉅
名古屋支社勤務社員
臺北支局勤務社員
吉田哲次郎

編輯局調査部勤務
廣東支局勤務社員　中野正光
編輯局寫眞部勤務
名古屋支社勤務准社員　石川八郎治
編輯局寫眞部勤務
編輯局政治部勤務社員　岩崎正雄
通信局整理部勤務
通信局英文部勤務社員　服部稔
北支總局勤務
總務局經理部勤務准社員　川原幾代
北支總局勤務
北支總局勤務社員　渡邊正二
天津支局勤務
編輯局寫眞部勤務社員　造道豐喜
中南支總局勤務
經濟局外經部勤務准社員　野田京子
中南支總局勤務
前田訓義
中南支總局事務囑託
編輯局寫眞部勤務社員　小澤徹郎
廣東支局勤務
總務局囑託　板谷幸太郎
命社員、總務局業務部勤務編輯局特信部兼務
大塚良一
命社員、編輯局寫眞部勤務
村上正好
命社員、紐育支局勤務
梁島清活
命准社員、通信局放送部勤務
長尾庸四郎
命准社員、中南支總局勤務
池田純一
社員試用、編輯局特信部勤務
永峰正樹
同、大阪支社勤務
米田力
同、大阪支社勤務
武田文男
同、大阪支社勤務
小路春美
同、大阪支社勤務
岡田丘
同、福岡支社勤務

高松義一
同、札幌支局勤務　金鎭琪
同、京城支局勤務　片山保
同、廈門支局勤務　米田杜子
准社員試用、經濟局勤務　羽田繁樹
同、大阪支社勤務　井上贇
同、大阪支社勤務　大脇富美子
同、名古屋支社勤務　吉田正男
同、札幌支局勤務　山下ソヨ
同、神戶支局勤務　山內龜美子
同、神戶支局勤務　佐賀秀夫
岡山支局勤務　李末愛
京城支局勤務　黃際源
同、廈門支局勤務
北支總局勤務社員試用　有馬安夫
中南支總局勤務准社員　奧村伊佐雄
同　林忠男
同　永松紀子
編輯局政治部勤務社員試用　福田義郎
名古屋支社勤務社員試用　杉浦試基雄
同　栗本太郎左衛門
札幌支局勤務社員試用　荒井秀信
函館支局勤務社員試用　小沼靖
神戶支局勤務社員試用　鵜瀞一郎
熊本支局勤務社員試用　兒崎又喜
同　熊谷啓二
京城支局勤務社員試用　合志廣吉
廣東支局囑託　德永康信
命社員(各通)
通信局技術部勤務准社員試用　笹山正治
大阪支社勤務准社員試用　北川富久子
札幌支局勤務准社員試用　高平正
命准社員(各通)
清水通信員囑託　長川部清一
總務局出版部勤務社員　本間文吉

職員規程第十九條第二項ニ依リ休職
北支總局勤務 滿洲國通信社出向社員　木下正敏
同　田島泰平
滿洲國通信社ヘ歸還ノタメ退社(各通)
**死亡(二月十八日)**
**京城支局通信主任　小池章**
神戶支局勤務准社員試用　尾上良子
京都支局勤務社員　小西善三
京城支局勤務准社員　高壽福
同　岩本ミヤ子
大阪支社勤務社員　青野義雄
同准社員　片岡さかゑ
同准社員試用　大井修
經濟局勤務准社員　山合榛名
大阪支社勤務准社員　山本喜久枝
北支總局勤務社員　長內敏榮
大阪支社勤務社員　佐藤友三
名古屋支社勤務准社員試用　荒川忠一
橫濱支局勤務准社員　大川半藏
神戶支局勤務准社員　胡田吉通
長崎支局勤務社員試用　中村靜雄
依願解職(各通)
新潟囑託通信員　高橋治太郎
清水囑託通信員　丸山清作
依願解囑(各通)
神戶支局勤務准社員　坂井慶子
通信局放送部勤務准社員試用　小野春夫
名古屋支社勤務准社員　青木時江
福岡支社勤務社員　竹村謙一郎
同社員試用　岡田丘
岡山支局勤務社員　疋田一男
臺北支局勤務社員試用　吳俊雄
依願解職(各通)

新聞通信調査会 JAPAN PRESS RESEARCH INSTITUTE